＜特集論文＞

オリンピック・パラリンピックと地域スポーツ

後　藤　貴　浩

The Olympic - Paralympic Games and Community Sports

Takahiro GOTO

キーワード：オリンピック・レガシー，生活の論理，縮小社会
Keyword：Olympic Legacy, Logic of Living, Shrinking Society

九州地方の小さな集落（全28戸）で[注1)]，70歳から90歳までの男女７名が集まりゲートボールを楽しんでいる．悪天候や祭りなどでゲートボール場が使用できない場合を除き，ほぼ毎日２時間活動している．会場は，集落中央の道筋にあるため，村人たちは毎日彼女らの活動を目にすることになる．ゲートボールは５人対５人で行う競技であるが，彼女らはその日の人数や体調，気候等に応じてやり方を変えながら楽しんでいる．そうやって40年以上も続けてきたのである．午前中に雨が降っていても，やみ始めると三々五々集まり，お茶菓子を食べ雑談したあと，１時間程度プレーする．ゲートボールは，彼女らの律動的な生活の一部となり，集落の日常的な風景となっている．

少々前置きが長くなったが，このような地域で行われている細々としたスポーツとオリンピック・パラリンピックとの関係をどのように論じればよいのであろうか．グローバル－ローカル，みる－する，非日常－日常とまさに対極的な位置関係として捉えられるオリンピック・パラリンピックと地域スポーツ[注2)]の関係について，2020年に向けてどのようなことが議論されているのであろうか．まずはそれを確認してみよう．

文部科学省や大会組織委員会[注3)]は，「する・みる・ささえる」という多様なスポーツとの関わりを通したスポーツ参画人口の増大やスポーツを観光資源にした地域活性化，スポーツ・健康関連産業の振興が期待されるとしている．また，レガシー論の立場から間野義之（2013）は，東京で実証した先進都市モデルを地方に展開することが可能であり，大会を契機に実施意欲が高まった地域住民の健康増進やスポーツを核にしたまちづくりを推進することができるという．

さて，図１は，公共性，経済性を２軸とするマトリックスの四象限の中で，人びとのスポー

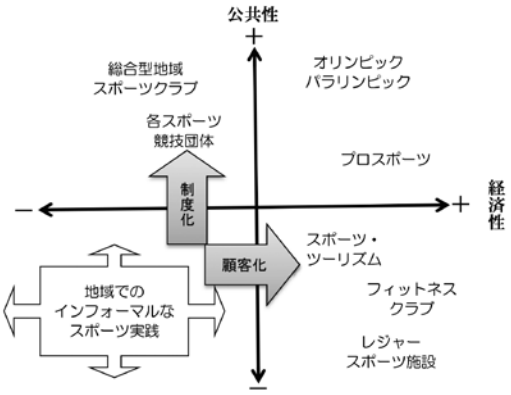

図１　スポーツ実践の四象限（筆者作成）

国士舘大学 文学部
〒154-8515
東京都世田谷区世田谷４-28-１

Faculty of Letters, Kokushikan University
4-28-1　Setagaya, Setagaya-ku, Tokyo 154-8515

ツ実践の位置づけを捉え直したものである．ここに先の議論を重ね合わせると，地域でのスポーツ実践の量的拡大，制度化，顧客化という一定の動きを描出することができる．その動きの前提には，オリンピック・パラリンピックで地域スポーツを変える，東京から地域を変えるという視点があり，換言すれば，東京（オリンピック）からのトリクルダウン論ともいえる．それは，さらなる人口増加と開発の可能性を持つ「東京」からの発想であり，「縮小社会」へと突き進む地方との間には大きな落差があるように思われる．

農学者の小田切徳美[注4)]は，1964年の東京オリンピックは日本社会を「過密と過疎の国」にする分岐点になったとし，2020年はさらに東京への投資と人口の一極集中が強まる可能性があるという．その上で，われわれは成長を唯一のエネルギーにして都市中心型国家を目指すのか，多様性のある地域づくりを目指すのかという選択に迫られているとする．彼は，地方には再生の手がかりをつかみかけてきた地域もあり，そのようなボトムアップの動きを政治や行政がいかにサポートできるかが問われていると主張する．

地域住民の動きを視野にオリンピック・レガシー論を展開する石坂（2013）は，長野オリンピックでカーリングの開催地となった軽井沢町・御代田町を事例に，オリンピックの開発主義的側面や政治力学とそれに関わる地域住民の対応について検証している．軽井沢町では，かつてのスケート文化からつながったネットワークと社会関係資本の構築がカーリングとの出会いを果たし，隣接する御代田町を巻き込み，２つのカーリング場を造成する動きとなったという．それらはオリンピック開催での大きな目標となり，大会後は「住民のよりどころ」の一つとなっていったと結論づけている（石坂，2013, p.186）．

事例とする軽井沢町がオリンピックの開催地であったことや財政的にも裕福な自治体であったことなど留意すべき点はあるものの，地域（地方）や地域スポーツを開発・改善すべき対象として捉えるような議論とは異なり，地域に形成されてきたスポーツ・レガシーとの関係からオリンピック・レガシーを捉えようとする試みとして評価される．

一方で，石坂が「住民のよりどころ」というとき，それはどのような住民で，どのようによりどころとなっているのかがやや不鮮明であり，結果的に軽井沢町という「地域」の実像が後景化してしまっているように思われる．筆者は，図１に示した第３象限に位置付けられるような地域での地道なスポーツ実践には，当該地域に住む人びとの生活のあり様や意識から導出される「生活の論理」が影響しているとみている．それを描き切ることによって「地域」の実像とそこで展開されるスポーツの社会的・地域的意味を問い直すことが可能になると考える．冒頭のゲートボール活動は，彼女らの「生活の論理」から逸れることなく実践されてきたからこそ存続してきたのである．

オリンピック（パラリンピック）・レガシーの一つとして，地域におけるスポーツ実践の量的拡大や制度化，顧客化を推し進めていくこと自体は決して否定されるものではない．問題は，そのことばかりがあまりにも強調され，地域でどのようにしてスポーツが維持・存続されてきたかが看過されてしまうことにある．2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて，一方向的なオリンピック（パラリンピック）・レガシーを模索するだけでなく，これまで地域で実践されてきたスポーツ・レガシーを捉え返すことも必要であろう．華やかなトップ・スポーツを頂点とした画一的・均一的なスポーツの拡がりを，「生活の論理」に基づく持続可能な地域的スポーツ実践へと組み替えていくことが求められる．

注

１）　筆者が2005年からフィールドワークを続けている熊本県阿蘇郡小国町の集落．

２）　本稿では，開催地東京における地域住民のスポーツ実践だけではなく，東京以外の

地方で展開されるスポーツ実践を含め「地域スポーツ」として議論を進めていく.

３）「アクション＆レガシープラン2016」（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会, 2016）および「オリンピック・パラリンピックレガシー創出に向けた文部科学省の考えと取組」（文部科学省, 2015）を参照されたい.

４） 2016年６月９日付の毎日新聞「日本のゆくえ－識者に問う－『地方創生』」を参照されたい.

http://mainichi.jp/senkyo/articles/20160609/ddm/002/010/035000c,（参照日2016年11月11日）.

文献

石坂友司（2013） カーリングネットワークの創出と展開：カーリングの聖地・軽井沢／御代田の取り組み. 石坂友司･松林秀樹編著,〈オリンピックの遺産〉の社会学. 青弓社, pp.168-189.

間野義之（2013） オリンピック・レガシー：2020年東京をこう変える. ポプラ社.